

マインド・マインデッドネス

松 島 暢 志

赤ちゃんは、私たちが思っているよりも、考える力やものを記憶する力を持っています。しかし、その赤ちゃんの能力は、大人と比べるとやはり未熟だと言わざるを得ません*¹。ところが、赤ちゃんと直接関わっている大人は、赤ちゃんには大人と同じような感情があると思えてしまうし、自分たちと同じ記憶を持っているように感じてしまうことがあります。例えば、生後1年目の赤ちゃんは「昨日何をしたか」のようなエピソード記憶はほとんどないと言われています。しかし、赤ちゃんに接している大人は「昨日はこれで遊んで楽しかったね。だから今日もこれで遊ぼうか。」などと、赤ちゃんにその記憶があるかのように感じて、接することがよくあります。つまり赤ちゃんの能力を正しく見積もることができず、錯覚や勘違いをしているということになります。錯覚や勘違いというとあまりいい意味には思えないかもしれませんが、しかしこの錯覚のおかげで、大人は行きあたりばったりではない、赤ちゃんへの一貫した関わりができることになります。

メインズ (Meins, E) は大人のこの錯覚、つまり「幼い赤ちゃんであっても心をもった一人の人間と見なす傾向」のことをマインド・マインデッドネス (Mind-Mindedness) と名付けました。最初のMindは「心」のことで、その次のMindednessは「気遣うこと」を意味します。つまりマインド・マインデッドネスは心を気遣う傾向、もっと正確に言えば、「赤ちゃんの心を無意識につい気にしてしまう」傾向のことです。例えば、1歳前後の赤ちゃんはまだ明瞭な言語を発話することができず、喃語などの不明確な発声になります。しかし、親や保育者はそ

の赤ちゃんの発声を、意味のない音だとは思わずに、「あ、『おもちゃで遊びたい』って言うてるんだね」や、「『ママがいなくてさみしいよ』って悲しい気持ちなんだ」と、過剰に解釈してしまうことがあります。これがマインド・マインデッドネスです。そしてこのマインド・マインデッドネスの傾向には個人差もあり、不安定型のアタッチメントを形成している母親より、安定型のアタッチメントを形成している母親の方が高いことが明らかになっています。

大人、特に母親のマインド・マインデッドネス傾向の高さは、その後の子どもの心的発達と関連するとも言われています。その理由はいくつかあります。まず、マインド・マインデッドネスがあることで、赤ちゃんの行動を「心あるもの」として錯覚するため、養育への動機づけが高まります。次に、関心が赤ちゃんの気持ちに向いているため、タイミングよく応答することができ、赤ちゃんの自己効力感につながります。さらに、赤ちゃんは記憶ができると思っ

* 1 これに関しては「和顔愛語48巻」の「乳児観の変遷」を参照

〈引用・参考文献〉

遠藤利彦『赤ちゃんの発達とアタッチメント 乳児保育で大切にしたいこと』、ひとなる書房、2017年